

【旧約聖書日課】イザヤ書 48章1～8節

- 1 ヤコブの家よ、これを聞け。
ユダの水に源を發し
イスラエルの名をもって呼ばれる者よ。
まこともなく、恵みの業をすることもないのに
主の名をもって誓い
イスラエルの神の名を唱える者よ。
- 2 聖なる都に属する者と称され
その御名を万軍の主と呼ぶイスラエルの神に
依りすぎる者よ。
- 3 初めからのことをわたしは既に告げてきた。
わたしの口から出た事をわたしは知らせた。
突如、わたしは事を起こし、それは実現した。
- 4 お前が頑固で、鉄の首筋をもち
青銅の額をもつことを知っているから
- 5 わたしはお前に昔から知らせ
事が起こる前に告げておいた。
これらのことを起こしたのは、わたしの偶像だ
これを命じたのは、わたしの木像と鑄像だと
お前に言わせないためだ。
- 6 お前の聞いていたこと、そのすべての事を見よ。
自分でもそれを告げうるではないか。
これから起こる新しいことを知らせよう
隠されていたこと、お前の知らぬことを。
- 7 それは今、創造された。
昔にはなかったもの、昨日もなかったこと。
それをお前に聞かせたことはない。
見よ、わたしは知っていたと
お前に言わせないためだ。
- 8 お前は聞いたこともなく、知ってもおらず
耳も開かれたことはなかった。
お前は裏切りを重ねる者
生まれたときから背く者と呼ばれていることを
わたしは知っていたから。

【福音書日課】 マルコによる福音書 8章27～33節

²⁷イエスは、弟子たちとフィリポ・カイサリア地方の方々の村にお出かけになった。その途中、弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」と言われた。²⁸弟子たちは言った。「『洗礼者ヨハネだ』と言っています。ほかに、『エリヤだ』と言う人も、『預言者の一人だ』と言う人もいます。」²⁹そこでイエスがお尋ねになった。「それでは、あなたがたはわたしを何者だと言うのか。」ペトロが答えた。「あなたは、メシアです。」³⁰するとイエスは、御自分のことをだれにも話さないようにと弟子たちを戒められた。

³¹それからイエスは、人の子は必ず多くの苦しみを受け、長老、祭司長、律法学者たちから排斥されて殺され、三日の後に復活することになっている、と弟子たちに教え始められた。³²しかも、そのことをはっきりとお話しになった。すると、ペトロはイエスをわきへお連れして、いさめ始めた。³³イエスは振り返って、弟子たちを見ながら、ペトロを叱って言われた。「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている。」

「サタン、引き下がれ」【こども説教のために】

主イエスが宣教の旅を続けていらしたときのことです。弟子たちに、「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」とお尋ねになられたことがありました。ご自分の評判が気になられたのでしょうか。いいえ、弟子たちがご自分のことを何者だと考えているのか、お尋ねになろうとされたのです。「あなたがたは？」と尋ねられる主イエスに、弟子の一人、ペトロは答えました、「あなたは、メシア（＝キリスト）です」。

教会では、「イエス」というお方を「主」とお呼びしたり、「キリスト」とお呼びしたり、あるいは「神の子」とお呼びしたりします。いろいろな呼び方をしますが、わたしたちは皆、このお方の歩まれた生涯の生き方を見て、その後について行こう、同じような生き方をしようと心に決め、歩みを共にしているのです。その共なる歩みの初めに「洗礼」を受けるのも、「四十日の荒れ野の誘惑」を記念して「受難節」を過ごすのも、このお方の生き方に倣って、神を愛し、隣人を愛する者として生きたいと願っているからです。

このお方は、生涯の終わりに、多くの苦しみを受けられ、十字架で殺されました。そうなることがお分かりだったのに、その道を避けることなく、まっすぐに進んで行かれました。その決意を聞かされた弟子のペトロは、とんでもないことだと思って主イエスの決意を翻させようとしたのですが、かえって主イエスに叱責されてしまったのです、「サタン、引き下がれ」と。主イエスの決意は、神の御心ならばたとえ苦しみ多く死に至る人生の道であっても、まっすぐに進んでいく生き方を貫かれることでいらしたのです。

「あなたは、メシア」

先週の金曜日、神学校（東京神学大学）の卒業式に参列し、わたしたちの教会で神学生として5年弱歩んでくださった榊原かをる神学生の卒業を共に祝わせていただきました。石神井教会からは、わたしのほかに6名ほどが参列して下さっていました。また、4月から伝道者として迎えてくださる教会からも参列して下さっている方がありました。

今年の卒業生で伝道者として任地に赴くのは11名でした。26年前にわたしが卒業したときと比べると三分の一ですが、一人ひとりが大切に育てられ、送り出されようとしていると思われました。以前のように新卒で困難な状況の教会に赴任する者は、ほとんどいないのです。とは言え、どの任地であっても、新任の伝道者にとって気楽なことはありません。若者であっても、社会経験を重ねてきた年配の者であっても、伝道者として立たされて初めて経験する苦労が必ず待っています。むしろ、人生経験もあり、教会生活も長い方のほうが、新卒の伝道者として壁に突き当たることが多いかもしれません。一人ひとりが、遣わされた地で、伝道者として順調に歩んでくださることを願いますが、万が一挫折し、道半ばで引き返さなければならなくなったとしたならば、そのときには、送り出した教会がその伝道者の帰って来る家になるのです。

「人々は、わたしのことを何者だと言っているか」。遣わされて行く伝道者は、この問いを問われるでしょう。教会には、実にさまざまな人がいます。同じ教会であっても、主イエスに対する認識は驚くほど違うことがあります。ましてや、教会が違えば、同じ『聖書』を用い、同じ伝統を受け継いでいるはずでも、一人ひとりの主イエスに対して抱いている思いが大きく違うこともあるのです。わたしも、転任のたびに、そのことを実感してきました。

そのとき、伝道者は、重ねて問われるでしょう、「では、あなた…はわたしを何者だと言うのか」と。神学校を卒業し、教師検定試験も合格した伝道者は、自信満々で模範解答を答えるかもしれません、ペトロのように「あなたは、メシア＝キリストです」と。いいえ、もっと厳密に、信仰告白に書かれているように。けれども、主イエスは、戒められるのです、ご自分のことをそのように言わないように、と。

ただ、主イエスは、お示しになられるでしょう、ご自分の行かれた道を。多くの苦しみを受けられた道、人々から排斥された道、殺されることになった道を。そして、その先に約束された復活の命に至る道を。

伝道者にはっきりと示されているのは、主イエスの行かれた道です。いいえ、伝道者だけではない、すべて主イエスと出会わされた者に示されているのは、このお方が行かれた道なのです。この道に続けと、主は言われます。

神のことを思う

今週の水曜日で、東日本大震災から 15 年となります。15 年前のあの日は金曜日で、やはり神学校の卒業式がありました。前任地教会に仕えていたわたしは、それまで三年間新卒と一緒に働いてもらっていた若い女性伝道師と共に、卒業式に参列していました。彼女の後任として迎える神学生が卒業式に臨むことになっていたからでした。震災は、まさに式の真っ最中に起こりました。当時の学長が式辞を述べられているときでした。東京でも震度 5 を観測しましたから、神学校のチャペルも大きく、そして長く揺れ続けました。何よりも、天上から吊るされたたくさんの照明器具が大きく振り子のように揺れ続けていました。学長は平然として式辞を続けられましたが、あまりに長く大きな揺れに、多くの参列者が慌てて外に飛び出しましたが、それでも式は中断することなく最後まで挙行されました。予定どおり、式後の茶話会まで開かれた後、参列者が知ったのは、すべての鉄道がストップしていることでした。バスは運行を続けていましたから、わたしと同行の伝道師は、帰路のバスに乗車しましたが、道路は大渋滞で通常の三倍も時間をかけてようやく目的地にたどり着くというありさまでした。結局、その日、わたしどもは藤沢の教会まで帰り着くことができず、バスで辿り着いた先の知己の牧師がいる教会に避難させていただくことになったのです。

そのとき一緒にいた女性伝道師が 4 月から被災地・福島の教会に赴任していった話は、これまでに何度もさせていただいてきました。藤沢教会は、まだ 20 歳代の若い独身の彼女が、事故を起こした原発近くの教会に送り出すことを躊躇しました。伝道師の住居を引き続き提供し、藤沢に留まることができるよう手配もしましたが、彼女は、教会の皆さんが引き留めるのを振り切って、示されていた被災地の任地へと赴いて行ったのです。

「サタン、引き下がれ。あなたは神のことを思わず、人間のことを思っている」。神に示されたところに行くことを阻むならば、わたしたちも、主イエスから、そう叱責されるでしょう。「その示された行く先は、良いところなのか、そうでないのか」と逡巡するわたしたちは、**人間のことを思っている**のです。神の御心を問い、神のご計画を知ることの遅いわたしたちは、いつも、**人間のことを思っている**のです。

それでも、わたしたちは、**神のこと**へと導かれて行くでしょう。主イエスと出会わされた者たちだからです。わたしたちを神の出来事へとお連れくださる主イエスを知るようにされた者たちだからです。このお方が、わたしたちの思いをただしてくださるのです、「サタン、引き下がれ」と。「わたしについて来なさい」(マルコ 1:17)、「わたしの後に…従いなさい」(同 8:34)と。このお方の後姿が、わたしたちの人生の希望のしるしなのです。